

プレスリリース

平成 14 年 8 月 6 日
水産庁漁場資源課
独立行政法人水産総合研究センター
東北区水産研究所

平成 14 年度北西太平洋サンマ長期漁況海況予報

- 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
東北区水産研究所がとりまとめた結果 -

今後の見通し(2002年8月~12月)

海況

- (1)沿岸の親潮は、平年より北寄りで推移するが、三陸南部から常磐近海では、一時的に冷水域の影響がある。
- (2)三陸沖にある暖水塊は、北東へ移動する。
- (3)東北近海の黒潮は、平年並～北寄りで推移する。

漁況

- (1)来遊量：来遊資源量は昨年並。
- (2)漁期・漁場：初期漁場は、道東から色丹島沖に形成される。漁期当初の漁況は低調であるものの、沖合からの魚群の加入に伴い漁況は好転する。魚群の南下は例年より早く、9月中旬には三陸沖に漁場が形成される。
- (3)魚体：漁期当初は中小型魚主体であるが、沖合から加入する魚群は大型魚主体である。また、昨年に比較して大型魚の体長モードは1cmほど小さく、肥満度が低い。

1. 本予報は水産庁のホームページ (<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業ホームページ (<http://abchan.job.affrc.go.jp/gk14/14gkindex.htm>)に掲載されます。

2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下のとおりです。

水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班 担当：竹葉、狭間

住所：〒100-8907 東京都千代田区霞ヶ関1-2-1

電話：03-3502-8111(内線7376)、ファックス：03-3592-0759

直通電話：03-3501-5098

電子メール：toru_hazama@nm.maff.go.jp

水産総合研究センター東北区研究所企画連絡室

住所：〒985-0001 塩竈市新浜町3-27-5

電話：022-365-1191 ファックス：022-367-1250 電子メール：kiren@myg.affrc.go.jp

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	(社)漁業情報サービスセンター
北海道立網走水産試験場	水産庁漁場資源課
岩手県水産技術センター	独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所
宮城県水産研究開発センター	東北区水産研究所 中央水産研究所
宮城県産業経済部	
福島県水産試験場	
茨城県水産試験場	
千葉県水産研究センター	
静岡県水産試験場	
三重県科学技術振興センター	

平成14年度北西太平洋サンマ長期漁海況予報会議 東北海区海況予報

平成14年8月6日

独立行政法人水産総合研究センター 東北区水産研究所

<<今後の見通し(2002年9~11月)>>

- (1)近海の黒潮の北限位置は、平年並からやや北偏(36°N~37°N)で推移する。
- (2)黒潮系暖水の北限位置は、近海で平年並、沖合で北寄りで推移する。
近海では、40°Nを越える。
沖合では、148°E~150°Eで41°Nを越える。
- (3)鮫角沖の暖水塊は北東へ移動する。
- (4)親潮第1分枝の張り出しは、北偏(40°30'N以北)で推移する。
親潮第2分枝の張り出しは、平年並(39°N付近まで)で推移する。
三陸南部から常磐近海では、一時的に冷水域の影響がある。
- (5)津軽暖流の下北半島東方への張り出しは、やや強勢(143°20'E付近)である。

《海況の経過(2002年1月~2002年6月)の特徴》

- ・近海黒潮の北限位置は、平年並で推移した。
- ・黒埼沖と常磐沖に暖水塊が存在した。
- ・親潮第1分枝の南限は、41°N付近(平年並~北偏)で停滞していた。
- ・一時的に常磐沿岸に暖水塊からの暖水波及があった。
- ・表面水温は、北海道沿岸域と沖合で平年より低め~高め、東北沿岸は平年並で推移した。

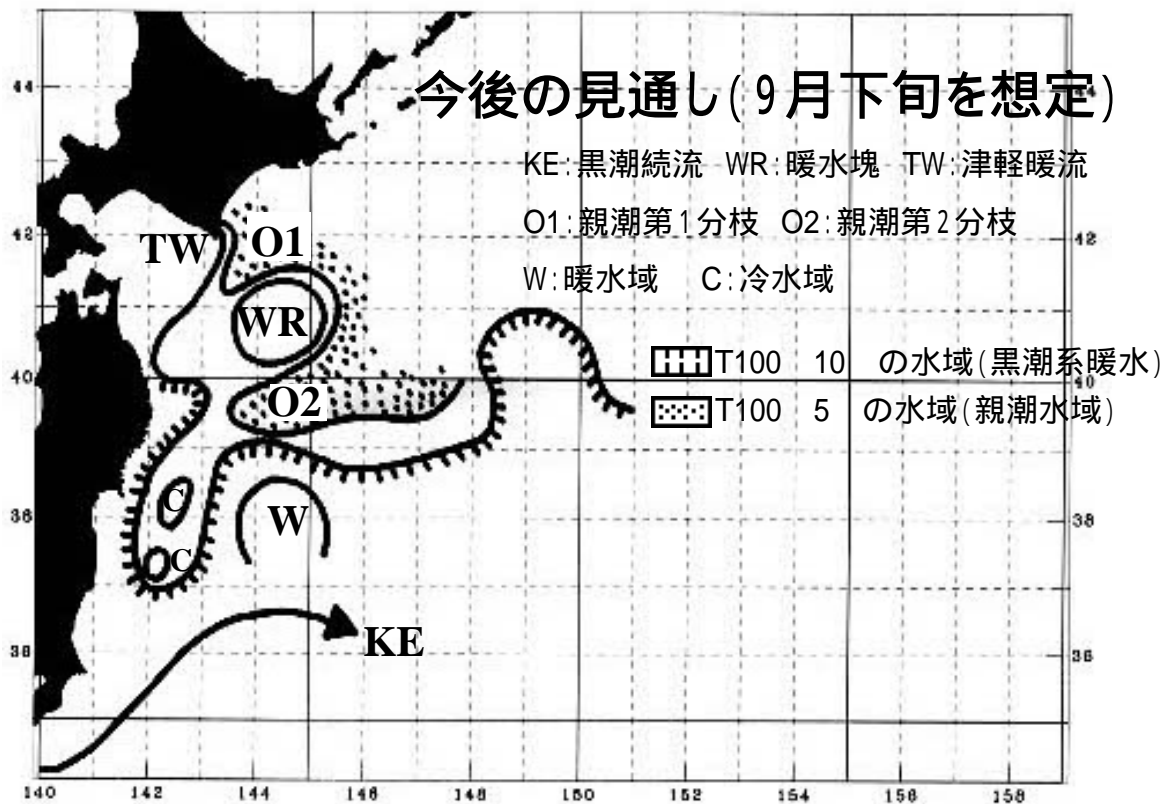
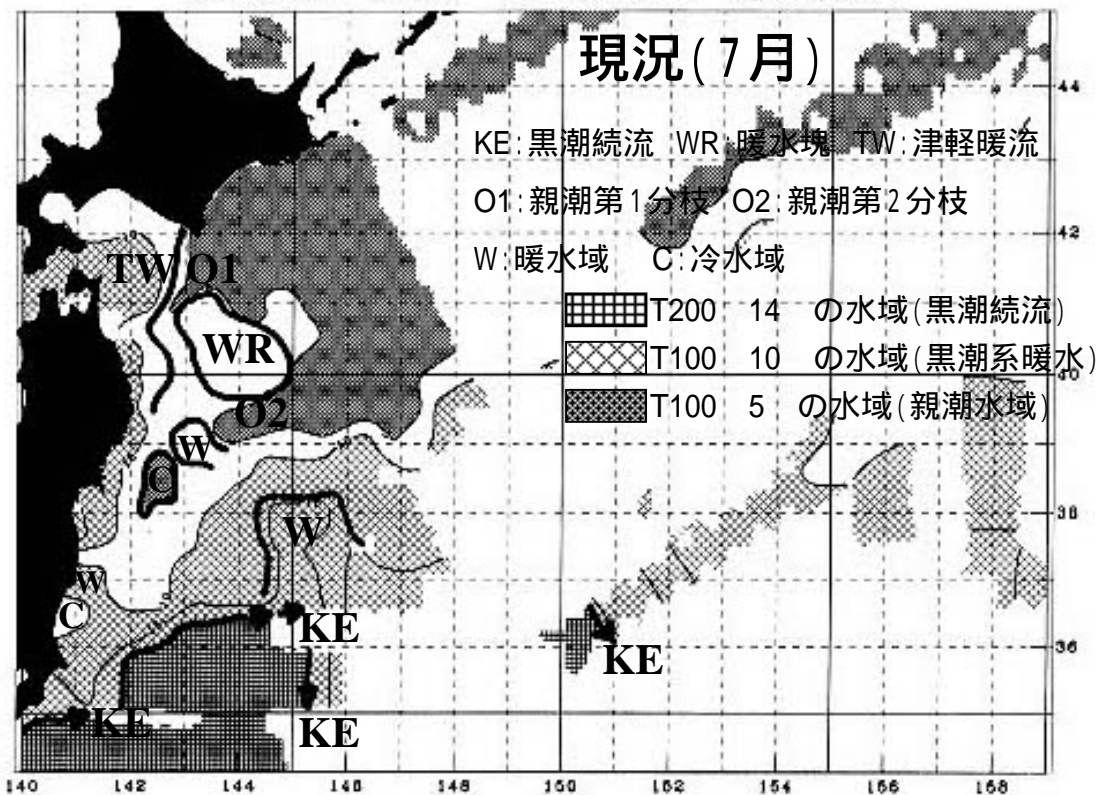
《現況(2002年7月)の特徴》

- (1)近海の黒潮の北限位置は、やや北偏(36°40'N)。
- (2)黒潮系暖水の北への張り出しは、近海で平年並、沖合で北寄り。
- (3)暖水塊が、鮫角の東約200km沖(40°20'N,144°E)にある。暖水域が、歌津埼の東約100km沖(39°N,143°10'E)、および請戸の東約400km沖(37°40'N,145°20'E)にある。
- (4)親潮第1分枝の張り出しは、やや北寄り(40°50'N)。
親潮第2分枝の張り出しは、平年並(39°N)。
冷水域が、金華山沖と常磐南部沿岸にある。
- (5)津軽暖流の下北半島東方への張り出しは、やや強勢(143°E)。

注： 現況および今後の見通しは図を参照のこと。

「近海」は146°E以西、「沖合」は146°E以东を表す。

SCHEMATIC DATE: 2002/0701 - 2002/0802



サンマ北西太平洋群長期漁況予報

予測期間 2002(平成14)年8月中旬～12月
予測海域 北西太平洋(道東沖から常磐沖)
対象漁業 サンマ棒受網
魚体 魚体の大きさは肉体長(体長)で表示し、便宜的に大型魚(29～32cm)、
中型魚(24～29cm)および小型魚(20～24cm)と区分した。

予報

- (1)来遊量：来遊資源量は昨年並。
- (2)漁期・漁場：初期漁場は、道東から色丹島沖に形成される。漁期当初の漁況は低調であるものの、沖合からの魚群の加入に伴い漁況は好転する。魚群の南下は例年より早く、9月中旬には三陸沖に漁場が形成される。
- (3)魚体：漁期当初は中小型魚主体であるが、沖合から加入する魚群は大型魚主体である。また、昨年に比較して大型魚の体長モードは1cmほど小さく、肥満度が低い。

説明

サンマの漁獲量は、1990年以降毎年25万トンを超え安定していたが、1998年には漁獲量が14.0万トンと前年比の約半分に落ち込み、1999年は13.5万トン、2000年は21.2万トンと3年連続して近年では低い水準にとどまっていた。しかし、2001年の水揚げ量は26.6万トンでやや回復し、北西太平洋におけるサンマの資源状態は、変動の大きい時期にあると考えられている。

本予報は、関係機関が本年の6月から8月に中層トロールおよび流し網等を用いて行なった北上期調査・漁期前一斉調査の他、仔稚魚を対象とした加入量調査と10トン未満船の漁業の情報に基づいて作成された。特に今年の予報では、東北区水産研究所が行った中層トロールを用いて資源量を推定した結果を、基礎資料として用いている。

(1)来遊量

6月11日～7月22日にかけて、東経145度から西経177度において、東北区水産研究所が北鳳丸(北海道実習船管理局)および若鷹丸(東北区水産研究所)を用いて行った中層トロール調査の結果、1曳網あたり平均982.7個体のサンマが採集された。この結果を昨年と同海域の162度以西での結果と比較すると、体長29cm以上の大型魚の割合が高く33.7%(昨年は12.2%)で中型魚は16.5%(同11.0%)であった。1曳網あたりの平均採集個体数では857個体で昨年の平均960.3個体をやや下回った。

この他、6月からの北上期に茨城県水産試験場水戸丸と釧路水産試験場北辰丸が流し網による調査で合計374個体採集したが、流し網1反あたりの採集尾数は2.1個体(昨年の結果

は9.9個体)であった。7月からの漁期前一斉調査(流し網)は、北海道立釧路水産試験場 北辰丸、岩手県水産技術センター岩手丸、および宮城県産業経済部新宮城丸が行い、1反あたり7.5個体(昨年は15.4個体)採集したが、この値は昨年の半数程度であった。これは、沿岸を北上した魚群が比較的少なかったことと、沖合で採集を行った北辰丸の調査点が分布域の北端にあたったためと考えられた。なお、東経147度から155度の調査が不十分であったため、この海域での魚群分布を正確に把握することができなかった。

以上の結果を総合すると、本年漁場に来遊するサンマは来遊尾数では昨年並み、重量では昨年以上を回るものと考えられた。

(2)漁期・漁場

沿岸を北上した群れが少なかったことから漁期当初の漁況は低調であるものの、沖合からの魚群の加入に伴い漁況は好転すると予想される。道東沖の親潮域の水温は昨年より低く、漁場の沖合化の指数となる沖合における親潮前線も平年並みからやや北寄りであることから、漁場は道東から色丹島沖合に形成されると考えられる。道東沖の親潮第1分枝の波及は強く沖の水温が低いことや、魚群の南下を阻む暖水塊や津軽暖流の強い張り出しがないことから、三陸沖への魚群の南下は平年より早いと考えられる。

(3)魚体

調査の結果、7月上旬には東経155度から160度付近に魚群が集中して分布していることが確認された。この海域でサンマが多数採集された採集点の水温は14.1度以下の低水温域であり、水温が15度以上の採集点ではサンマの分布は少なかった。採集されたサンマの体長組成には20cmと30cm付近にモードが見られた。このように、漁期前における今年の魚群分布の特徴は、低水温域に魚群の分布が偏っていたこと、調査海域全域にわたり大型魚の群れに中型魚および小型魚が混在していたことがあげられる。以上の点から、漁期当初は中・小型魚が主体となるが、沖合からの魚群の加入に伴い大型魚が主体となる。しかし、大型魚のモードは昨年より1cmほど小さく30cm付近にあり、肥満度も低かった(30cmの個体と比較すると昨年より体重が20~30g程度軽い)。そのため、今漁期に漁獲される大型魚の平均の体長と体重は、昨年を下回ると思われる。また、中型魚および小型魚の混入の割合が高いと予測される。

道東沖で7月8日から始まった10トン未満船の31日までの総水揚げ量は1,078トン(暫定値)で、平成7年以降ではもっとも漁獲が多かった昨年(2,098トン)の約半分であった。これらの漁獲物の主体は29~31cmとなっていたが、8月に入ってからでは中・小型魚主体に変化した。これらは、若鷹丸による調査で東経147度以西において採集された魚群であると考えられる。若鷹丸で採集されたサンマの体長組成は大型および小型魚が主体となっていることから、沖合の魚群が加入するまではこれらの魚群が漁獲対象になると考えられる。

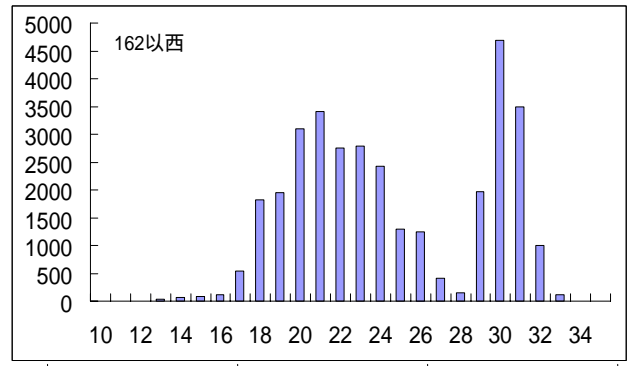
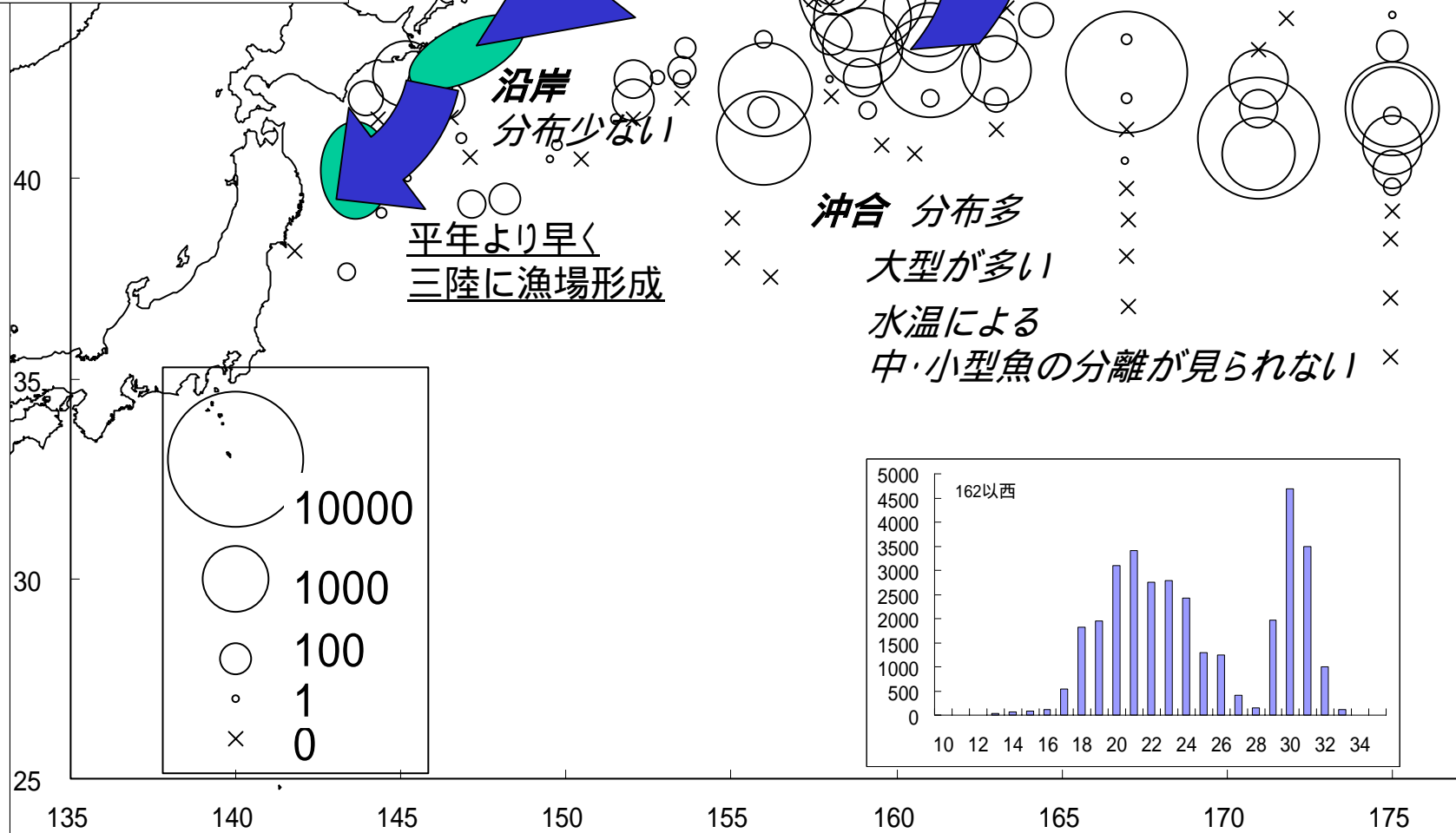
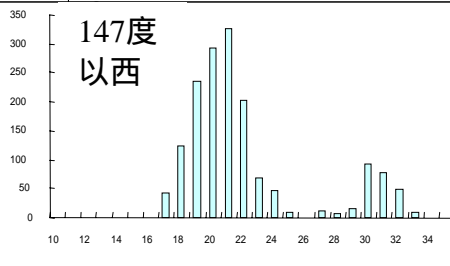
主群は沖から加入(大型主体で中小型の混入)

初期漁場
漁期当初は不調

沿岸
分布少ない

平年より早く
三陸に漁場形成

沖合 分布多
大型が多い
水温による
中・小型魚の分離が見られない



2002年サンマ漁期前調査のまとめと予報の概略
(斜体; 調査結果、下線; 予報)